

であります、我國の鐵道には客車にても貨車にても將又機關車にてもロケットの如く固有の名を命じたものはありませぬが外國にては現今にても命名は盛に行はれて居ります、船には我國にても秀吉の命じた日本丸を始めとして昔より命名して居りますから、どうか鐵道の車輛にも一新例を開きたいものとおもひます、軍艦には初瀬、富士、曙など、優美なる名を命じて居ります、鐵道車輛にも何とか命名したらは殺風景なる事業も名聞だけでも少し優美になるであらうとおもひます、餘計のことなからかもひついた次第を申上げおさます、

以上述べましたところは今日見るところの機關車にて他の車輛を連結したものを牽引して一つの運送事業をなすに足るだけに發達するまでの線路

四十一
及車輛の起源沿革であります、勿論此時代に於ては鐵道の事業は石炭の運送を主としたものでありますから客車といふものは未だ發達して居りませぬ時と御承知を願ひます
(未完)

夢のはなし (ついで)

東 基 吉

前號では、睡眠のことに、夢を見る時のこと、夢の原因などの事に付いて記して見たが、今度は大體
夢とは如何なるものかといふとに付いて書いて見たいと思ふ。考へて見ると夢の世界ほど不思議なものはない。現實の世の中では到底出來ないことが、夢の世界では譯もなく出来る。吾々は子供

の時に、よく羽が生へて瓢々乎と獨り手に空中を飛び歩く夢を見た。かと思ふと又溺れもしないで水の面を平氣で歩いて居る、時には地面を掘ると彼處からも此處からも銀貨や銅貨が轉かり出て來て拾ひきれぬ様なこともある。或は高い高い屋根の頂上から急に落つこちたと思つて愕然として目を覺ますと、何でも無い、脚を立て、寢て居たのが、知らないで其脚を下したのであつたり、又冬の寒い晩、炬燵に足を穿つ込んで寢て仕舞つて、夜中に大火事に出遭つて身體中こげ相に熱いと思つて驚いて醒めて見ると、安んぞ知らん炬燵の火が少しばかり足に觸つたのであつたりすることが度々ある、夫からまだ面白いことは、今東京に居るかと思ふと、忽ちにして大阪の邊へ行つて居る、今學校で友達と一所になつて、遊戯でもして居る

と、思ひも寄らず、何時ぞの昔に彼の世の人となつた、年の寄つたおつ母さんまでが遊び仲間に入つて、キヤツキヤツと言つて騒いで居る。夫に自分は不思議とも何とも思はないで友達に紹介したり何かして居る。實に夢に於ては、聯絡も關係もない雑多の事柄が、夫から夫へと結び付いて、際限も止度もなく進んで行くものである。けれども、要するに吾々は決して以前に見たり聞いたりして居ない者は、夢の中には顯はれない、全く無關係な、全く知らない、一向經驗しないものは、決して夢には見ないといふのは事實である。成程時には思ひ懸けない事を夢に見る、併し夫でも夫は何時が見たか聞たか、乃至は考へたかした所のものが、現の時には忘れて居たのだが、夢になつて忽ち顯はれて來たものである。だから夢といふ

ものは、取りも通さず、吾々のこのろの

思ひ返しの作用である。一度経験した事を思

ひ返すのである。尤も、思ひ返しの作用には、

二種の區別がある。一は、以前経験した所の

事を、全くありの儘に、少しも違はない様に、例

令ば、何時何日、自分はかくくの處でかくく

の事實を經驗したのだと云ふ様に思ひ返す、之は

心理學上で通例記憶作用といふのである。他の一

は之と同じく、思ひ返しには違ないけれども、以

前の儘に少しも前と變らぬ様に、思ひ返すのでは

ない。(だからた、思ひ返すといつては語弊がある

かも知れない。)即前に經驗した事柄を、種々に形

を變へて、種々な風に極めて自由に、心の中に再

現するのである。心理學上此作用を想像といふ。

だから、想像作用では其心の思ひ返しの作用が、

頗る

自由なのである。例令ば、吾々は鳥の空中に飛

行自在なのを見て知つて居る。處で、吾々は、之

を種々に形を變化さして考へ出す事が出来る。吾

々は通例歩くより他には出来ないけれども、想像

で以て、自由自在に羽を生して、空中を飛行する

事を考へることが出来る。これは畢竟、鳥が飛ぶ

のを經驗した其経験を、今度は飛ぶ事か出来ない

人間といふものに變化して心の中に再現したので

ある。吾々の想像は此通り、現在の出来事に超絶

して居つて、至極自由である。其範圍は茫漠とし

て際限がない、人間の考と云ふものが、ただ何處

までも現在に束縛せらるゝものであるならば、人

間といふものはまことに不幸な、まことに果敢な

いものであるけれども、幸にも此想像の作用がわ

るからして、大に幸福な生活を享けることが出来るのである。吾々の今日の生活は實に憐なものである。吾々の家は只だ膝を容れるに過ぎない、吾々の衣服はたい寒暖を覆ふに過ぎない、食ふに美味のあるでなく、のみならず時には明日の糧を如何にせんと悶へることなど度々ある身分である。併し、想像の作用は、此缺乏だらけの生活の間に居て吾々に偉大な幸福を興へる。吾々は將來を想像して、世界中の富を集めたる王になることも出来る。どんな金殿千樓に住んで居るとも想像せられ、或はどんな大事業でも完成する事も考へ付かれるのである。要するに只だ現實の處では、實にどこへ行つても頭がつかへる様であつても、想像の作用となると、天地に亘り六合に擴かりて吾々の心を走らせることが出来るのである。處が此想

像の作用は

又二種に分れる。一は何ても自分で題目を決めて

想像するので、一は別に想像しやうと思はないで

居つて、併も種々の想像が獨り手に、夫から夫へ

と取止もなく心の中に起つて來るのである。そこで、

夢は畢竟此第二種の想像に屬するのである。

(未完)

